

# 原子力災害における避難コミュニティにおける地域の記憶の継承方法に関する研究 — 福島県富岡町での復元模型ワークショップにおいて収集された記憶の見える化を通じて —

Study on How to Inherit Local Memory in Evacuation Communities in a Nuclear Disaster  
— Through Visualisation of Memories from the Restoration Model Workshop in Tomioka Town —

槻橋修<sup>\*1</sup>、谷口浩都<sup>\*2</sup>、磯村和樹<sup>\*3</sup>、友瀨貴之<sup>\*4</sup>

Osamu TSUKIHASHI, Hiroto TANIGUCHI, Kazuki ISOMURA, Takayuki TOMOBUCHI

福島第一原子力発電所事故により福島県内12市町村に避難指示が出され、地域コミュニティは甚大な変容を被ることとなった。事故後、計画的避難区域となった富岡町の全域は住民全員が区域外へ避難し、2017年に一部の避難指示解除となったが、この間に多くの家屋や建物が取り壊され街並みは変貌してしまった。本研究では2015年5月に開催した復元模型WSにおいて収集された富岡町中心部の記憶を分析し、見える化することで、富岡町中心部の空間構造を明らかにするとともに、かつての生活空間の特徴を継承しやすくする手法について考察を行う。特に模型上に集められた記憶からクラスターを抽出し場所性の強い地点を顕在化するとともに、道路や河川など線上に形成されるクラスターを地域空間の特徴的な構造を表すものとして位置づけた。

キーワード: 原子力発電所事故, 避難コミュニティ, 復元模型, ワークショップ, 記憶のクラスター

Keywords: Nuclear Disaster, Evacuated Community, Restoration Model, Workshop, Cluster of Memories

## 1. 研究の背景と目的

2011年3月11日に発生した東日本大震災に伴って発生した福島第一原子力発電所事故により福島県内12市町村に避難指示が出され、地域コミュニティは甚大な変容を被ることとなった。特に福島第一原子力発電所から20km圏内の警戒区域、事故後1年間の積算線量が20ミリシーベルトを超える恐れのある計画的避難区域となった富岡町、大熊町、双葉町、浪江町、葛尾村、飯館村の全域は住民全員が区域外へ避難することとなった。これにより、福島県全体の避難者はピーク時の2012年5月で約16.5万人の住民が他市町村に避難を行い、その後、数年間にわたり除染作業が進められた。年間積算線量が下がった区域から段階的に避難指示解除が進められているが、事故から10年が経過した2021年3月時点においても約3.6万人が避難を続けている<sup>(1)</sup>。

筆者らは震災によって失われたのは建物などの街のハードだけでなく、人々の心の中にある「場所」や「空間」に密接に関わっている街の記憶もまた、時間が進むとともに失われることに着目し、発災直後より、大きな被害を受けた地域の被災前の街並みを復元する「失われた街」模型復元プロジェクト(以下、失われた街PJ)において、東日本大震災の被災地をはじめとする多数の地域で被災前の生活空間を1/500のジオラマ模型で復元する取り組みを進めてきた<sup>(2)</sup>。特に模型を用いて住民参加型ワークショップを行い、地域の姿や営みに関する記憶を収集「記憶の街ワークショップ」(以下、WS)によって、場所や空間に密接に関わる地域の記憶の保存・継承方法について模索してきた。WSの結果、記録されたテキストデータから生活文化を抽出し、場所の形状や機能から育まれるその場所特有のアイデンティティである場所性を示してきた。また同時に、津波

\*1 神戸大学大学院工学研究科 准教授・博士(工学)

Associate Professor, Graduate School of Engineering, Kobe University, Dr.Eng.

\*2 鹿島建設株式会社開発事業本部・修士(工学)

Kajima Corporation Development Division, M.Eng.

\*3 神戸大学大学院工学研究科 技術職員・博士(工学)

Technical Staff, Graduate School of Engineering, Kobe University, Dr.Eng.

\*4 宮城大学事業構想学群 助教・修士(工学)

Assistant Professor, Faculty of Project Design, Miyagi University, M.Eng.

による被災ではなく、原発事故によって何年間にもわたって住み慣れた土地を離れて生活することを強いられた避難区域の街に関しても、同様のWSを開催してきた。

本研究では2015年5月に開催した福島県双葉郡富岡町でのWS「記憶の街ワークショップ for 富岡町」<sup>(3)</sup>において収集された富岡町中心部（富岡地区・夜ノ森地区）の記憶を分析し、多くの住民に共有され証言された場所性の強い場所がどこにどれくらい存在しているのかを明らかにし、記憶を見える化することで、富岡町中心部の空間構造を明らかにするとともに、かつての生活空間の特徴を継承しやすくする手法について考察を行う。各地で避難指示解除とともに復興計画・帰還促進の取り組みが始まっていく中で、事故時幼少だった子供達が避難地域から地元で小学生、中学生となって帰還する例や、新規に地域に転入してくる住民に対して、地域住民が世代を超えて育ててきた場所性を継承していく手法として本WSの成果の活用が期待される。

## 2. プロジェクトの経緯と既往研究

筆者らが東日本大震災以降10年間にわたって被災地各地で継続的に取り組んでいる失われた街PJは、発災直後の2011年3月に発案され、以後神戸大学槻橋研究室が中心となって全国の建築やまちづくりを専攻する大学研究室と組織した『「失われた街」模型復元プロジェクト実行委員会』（以下、委員会）によって制作・実行されてきた。2015年以降は制作した復元模型を保管し、順次各地へ寄贈する事業を「一般社団法人ふるさとの記憶ラボ」（以下、ラボ）が担い、以降、実行員会と参加大学研究室が模型制作とWSの運営を、その後の寄贈・活用をラボが中心となって行い現在に至る。失われた街PJは大別して白いジオラマ模型制作（以下、模型制作）と記憶の街WSからなる。模型制作は白い発泡スチロールなど一般的な模型材料を用いて縮尺1/500、1m四方の領域で対象地域の500m四方をジオラマで制作する。対象敷地が広範囲にわたる場合は、1m四方の模型(1pixel)を組み合わせて制作する。制作したジオラマ模型を被災現地に運んで1週間程度の展示会を開催し、期間中訪れた地域の参加者に声をかけ、被災前の街の思い出を語ってもらい模型上に住民らの場所の記憶を集めるWSが「記憶の街WS」である。

失われた街PJの成果に関する研究としては、岩手県大槌町中心市街地を対象に行ったWSの成果を

分析し、地域の空間像がどのように描き出されているかを分析した研究（槻橋、他、2014）<sup>(4)</sup>や、磯村らによる7年間にわたるプロジェクトの実施手法の変遷を通じた地域空間再生の取り組みにおける地域社会との関係構築手法に関する研究（磯村、他、2019）<sup>(5)</sup>などがある。また記憶の継承に関しては阿部らによるハンセン病施設の保存を対象として記憶の継承における空間の残存度、関係者間議論による価値の共有の相関関係を分析した研究（菅谷、他、2019）<sup>(6)</sup>があるが、広範囲な地域空間を対象とした地域社会の集合的記憶の継承方法を対象にした研究はない。

被災地の地域社会が現地で復興に立ち会うことができた津波被災地と異なり、原発事故で避難した地域コミュニティは遠く離れた場所で長期間にわたって生活することを強いられた。津波で地域空間を面的に喪失するのは異なり、避難期間中の老朽化や家族形態の成長・変化により帰還を断念し、多くの家屋が解体・撤去され街の風景は大きく変容した。事故後10年が経過し、福島県沿岸部各地でようやく帰還の動きが本格化し始める中で、避難前の街並みと場所の記憶をこの10年間に育った次世代や新しく地域に転入してきた住民に伝えていくことは急務である。2020年9月に双葉町に東日本大震災・原子力災害伝承館が開館し、2021年7月に富岡町に「とみおかアーカイブ・ミュージアム」が開館するなど、帰還に合わせて伝承活動の動きが始まる中、失われた街PJで制作された復元模型も収蔵・展示が行われる機会が生まれた<sup>(4)</sup>。WSの成果を分析し、地域の記憶からかつての生活空間を読み取り、伝承していく手法の開発が必要である。

## 3. 対象地区と方法について

### 3.1 富岡町（富岡・夜ノ森地区）

研究対象地区は隣り合う町で同時期に発展してきたにも関わらず、異なる震災の被害を被った福島県双葉郡の富岡町の富岡地区と夜ノ森地区とする。福島県双葉郡は浜通りと呼ばれる沿岸部に面し、戦国時代に岩城氏・江戸時代に磐城平藩の領地だった檜葉郡（夜ノ森以南）と、戦国時代から江戸時代まで相馬氏（江戸時代は中村藩）の領地だった標葉郡（夜ノ森以北）が、1896年に合併されて成立した。その中で、富岡町北部に位置する夜ノ森地区は富岡町と大熊町の境に位置する森林地帯である。浜通りの境界部となっており、夜ノ森地区を境に方言や交流圏、歴史的色彩なども異なる。

富岡町にはJR常盤線が町を縦断しており、2つの駅が町内に存在している。1つは北の夜ノ森地区に位置する夜ノ森駅、もう1つは南の富岡地区に位

置する富岡駅である。この2つの地区は同じ町内にも関わらず、被害状況が全く異なる。夜ノ森地区は富岡町の中でも内陸にあり、福島第一原子力発電所から南西6kmに位置する。そのため津波による大きな被害は無かったものの、放射能の影響から警戒区域、その後は帰還困難区域に指定された。2020年に夜ノ森駅とその周辺、主要道路など避難指示区域が一部解除されたものの、現在も引き続き期間困難区域に指定されている。一方、富岡地区は地区内を二分するように富岡川が流れ、富岡町内でも津波の被害を受けた地域である。2013年年3月までは夜ノ森同様警戒区域に指定されていたが、2017年に避難指示が解除された。避難指示解除後は富岡地区各地で復興事業が進み、2018年4月には文化交流センター、教育施設が再開された。

### 3.2 記憶の街WSの概要

筆者らが主催した「記憶の街ワークショップ for 富岡」は2015年6月1日から7日の7日間、郡山市といわき市の避難先の2カ所で開催された。夜ノ森地区と富岡地区の両地区について、地域の協力団体の意見を踏まえ、それぞれ地域の中心的なエリアを復元模型で制作した。(図1)

WSの来場者は2会場あわせて358名であった。夜ノ森地区は夜ノ森駅を中心に有名な桜並木を入れた10ピクセル(縮尺500分の1、1m×1mの模型10ピクセル)の縦2km、横1.5kmの範囲、富岡地区は富岡川を中心に駅や学校を入れた10ピクセルの縦1km、横2.5kmの範囲を復元した模型上に生活空間の記憶が集められた<sup>6)</sup>。WSに参加した住民によって模型上に立てられた「記憶の旗」は2拠点総計2408本(夜ノ森1248本、富岡1160本)、模型を囲んで住民が話す内容をWSスタッフの学生が書き取った「つぶやき」は352件であった。(写真1)

「記憶の旗」は内容(名称-青、体験・出来事など-黄、防災・安全-赤、自然資源-緑、伝統・伝承-紫)によって5色に分けられており、その内訳は右表の通りである(表1)。住居、店名などを表す青の旗が全体の3分の2を占めるが、「2人で手を繋いで夜桜の下を歩いた」、「灯籠流しをした」などの体験や出来事を表す黄色の旗も青に次いで多い。名称を表す青以外の「記憶の旗」を模型製作範囲を示す図上にプロットしたものを図2に示す。

### 4. 収集された街の記憶

記憶の街WSは、復元模型を使用した着彩-対話型

WSとして行う。制作した白い復元模型を現地に一定期間展示し、訪れた住民が模型を囲み、震災前の街について語る内容を証言として記録していくという方法である。「模型上に家はありましたか」、「思い出に残っている場所がありますか」といった単純な質

表1 WSで得られた記憶の旗の本数

カテゴリー	旗色	夜ノ森	富岡	小計
名称	青	873	667	1540
体験・出来事など	黄	365	355	720
防災や安全に関わる事項	赤	18	37	55
自然資源や緑に関する事項	緑	39	44	83
伝統・伝承など	紫	18	57	75
合計		1248	1160	2408



図1 夜ノ森地区と富岡地区の模型製作範囲



写真1 夜ノ森地区(上)富岡地区(下)全体模型

問からはじまり、語られる内容を記録する。証言者を事前に選定せず、WS 会場に展示した模型の周りで、制作したスタッフ達との対話によって発言を促していく。これにより、1人で模型を眺める時と比較し記憶が連鎖的に思い出され、より深い証言や記憶を聞き出すことができる。同時にWS 期間中、白い模型にその場で着彩を行い、その際来場者にも作業への参加を促し、その過程を通してより詳しく地域の思い出や被災時のことについてヒヤリングを行う。また、1週間程度の開催期間中において、何度でも来場でき、日を重ねるごとに模型が色づき、プロットされた記憶の旗の数も増すため、前日までにプロットされた旗を契機に、会話が深まることも少なくない。

収集される証言や記憶が膨大な理由は上記のような期間の長さ、参加様式、模型を介した会話によるものが大きいと考えられる。一方で、「旗」を立てるプロセスは復元模型を自らの空間体験や記憶の場所とすり合わせる過程であるとも言えるが、WS において一人を立てる「旗」に限度は設けず、一人でいくつもの「旗」を立てる来場者もいる。そのため模型上においては同一人物による証言の関連性を再現できていない点や、参加者の発話の内容に統一性はなく、特定の質問に対する回答としての客観的な評価には適していない点があるが、同一の復元模型上で各々の都市空間の認知を表現したものとして、都市の空間的記憶を評価することができる。WS 後の模型を後日見るだけでは、いくつかの旗に書かれた内容を読み取ることはできても、記憶の集合が表す関係性について読み取ることは容易ではない。次世代の子供たちや新規に地域に転入してくる住民達に街の記憶の継承を実現していくことを考える上で、地域住民が世代を超えて育ててきた場所性を読み解き、継承していく手法が必要である。

右図(図2、図3)に示す「つぶやき」と4色の「記憶の旗」の分布をみると、破線で囲んだように記憶が凝集している幾つかの場所があり、多くの方が同じ場所について語っていることが認識できる。また、証言が道路や川に沿って連続的に、ある程度の距離を持った「線的な要素」で集まっていることが認識できる。「記憶の旗」がプロットされた模型を覗き込むと、旗が凝集している部分には同じ場所についての記憶が読み取れる。左下の写真2を例にすると、「富岡第二小学校」という青色(名称)の旗に対して、「昔は木造」や「木がたくさんあり、かくれんぼをし

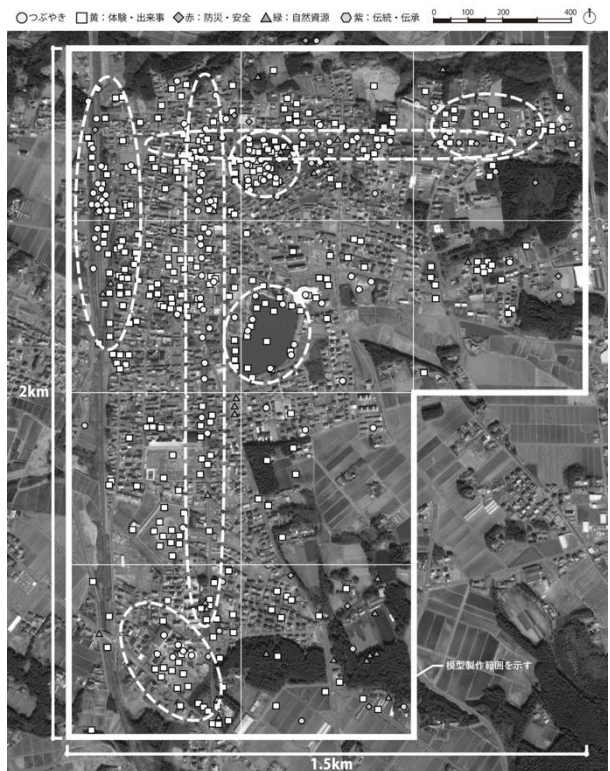


図2 夜ノ森地区 375本の記憶の旗(青色を除く)と103件のつぶやきの分布図



写真2 富岡第二小学校の模型



図3 富岡地区 493本の記憶の旗(青色を除く)と110件のつぶやきの分布図

た」のような黄色（思い出）の旗、「タイヤ飛びをしていた。校庭で高学年のボールが顔面に当たった。」などのつぶやきが関連してプロットされている。つまり一つの場所（青-名称）に対して複数の旗（黄色-出来事など）が関連してプロットされているとおり、駅や学校など多くの人々にとって思い出の残る場所には、関連する数多くの記憶の旗を立てられる傾向にある。俯瞰的に見ると無造作に散らばっているように見える場所の記憶の集合は、内容を読み取ることで再度関連する群（クラスター）として抽出することが可能なのである。特に富岡町の例では、桜ライン、桜通り、富岡川、中央通商店街、夜ノ森駅において記憶が空間構造に沿って線的に連続して見られた。本論では、富岡地区における「つぶやき」と「記憶の旗」のクラスター化を通じた分析から、街の記憶の見える化を試みる。

## 5. 街の記憶のクラスター化

富岡地区における「つぶやき」と「記憶の旗」について、関連する記憶をそれぞれクラスターとしてまとめる分析を行う。クラスターは青の旗（名称）で示される同一の場所に対して関連づけられるその他の色の「記憶の旗」と「つぶやき」によって形成できると考えると、各クラスターは、それぞれ関連づけられた記憶の個数によって大きさに違いが生まれる。より多くの記憶が関連づけられる場所もあれば、一つの場所に一つの記憶だけが関連づけられる小さなクラスターもある。こうした観点で模型上に集められた記憶をクラスター分けして評したのが下図（図4、図5）である。図中に表す便宜上、「記憶の旗」と「つぶやき」の数の総数によって10個以上を「大」、5個～9個を「中」、1個～4個を「小」という3段階の大きさの円で表し、大には総数と旗、つぶやきのそれぞれの数、中、小には総数を記入して表した。夜ノ森地区では大が8箇所、中が4箇所、小が22箇所の合計34箇所となり、富岡地区では大が11箇所、中が10箇所、小が59箇所の合計80箇所となった。また、記憶が線的に連続した場所ではクラスターが大きくなる傾向が見られた。

夜ノ森地区において、クラスターが最大となったのは夜ノ森公園の45個で旗が32個、つぶやきが13個である。続いて線的要素である夜ノ森駅の総数35個、桜ラインの総数34個、夜ノ森つつみ公園、桜通りと続く。一方で富岡地区においては、線的な要素で約2kmに渡る富岡川が51個で最大とな

り内訳は旗が32個、つぶやきが19個であった。続いて富岡漁港の39個、中央通り商店街が30個、富岡高校、富岡公園と続き、夜ノ森、富岡の両地区共に線的な要素が現れた場所が上位を占めた。

中サイズのクラスターは地元の複合商業施設であるヨークベニマル、電気屋、神社などがあげられ、大は公共施設が多いのに対して、地域のランドマーク的な要素があがっている。小サイズのクラスターは公民館や飲食店、郵便局、病院など、多岐にわたっている。図6に大、中、小それぞれのクラスターを構成する内容について、主だったクラスターを挙げて表記した。次項では夜ノ森地区と富岡地区の記憶のクラスター比較、線的な要素に焦点を当てて分析を行う。

### 5.1 自然と共生する生活空間

今回、富岡町WSで収集された証言のうち、桜にまつわる記憶の旗、つぶやきが一番多く集められた。桜は明治33年に夜ノ森地区が開拓された際に植えられ、町のシンボルとして多くの住民や観光客を賑わせた。地区には桜通りと桜ラインの2つの桜並木が存在し、南北に伸びた桜ライン（旧名：八間通り）で樹齢80～100年、東西に伸びた桜通りで40年～60年と町は桜と共に発展してきた。その夜ノ森地区において、桜の証言が最も多く収集されたクラスターが桜通りであり、記憶の旗とつぶやきを合わせて21件、続く桜ラインにおいても17件と桜に関する証言が過半数を超えた。証言には「桜が愛のキューピッド」や「桜がさみしがっていた、早く戻って抱きしめてあげたい。」などのようにただ花見をする以上に住民の方々の生活の一部になっている証言が多く見られた。また、桜だけでなく、夜ノ森駅を中心にツツジも有名で、夜ノ森駅に集められた35件の証言のうち22件がつつじに関するものであった。「夜ノ森全員でつつじを管理していた」という地域に愛された空間であっただけでなく、「ツツジが満開の時は電車が速度を落とす」とJR常盤線も含め富岡町全体でつつじに愛着を持っていたことがわかる。このように夜ノ森地区は桜やつつじをはじめとした自然を中心に人々が集い、活気ある生活空間を育んできたことと捉えることができる。

一方、富岡町は、富岡川や海岸沿いに多くのクラスターが発生していることから、自然環境に対して人々が集い育まれてきた地域だといえる。富岡川には「鮎を手づかみ!」、「イワナをとった」、「鮭があがってくる」などの証言が寄せられ、富岡漁港

凡例 〈記憶の旗〉(青)に寄せられた〈つぶやき〉と〈記憶の旗〉(黄)の数の合計による円の大きさの変化を以下に記す。

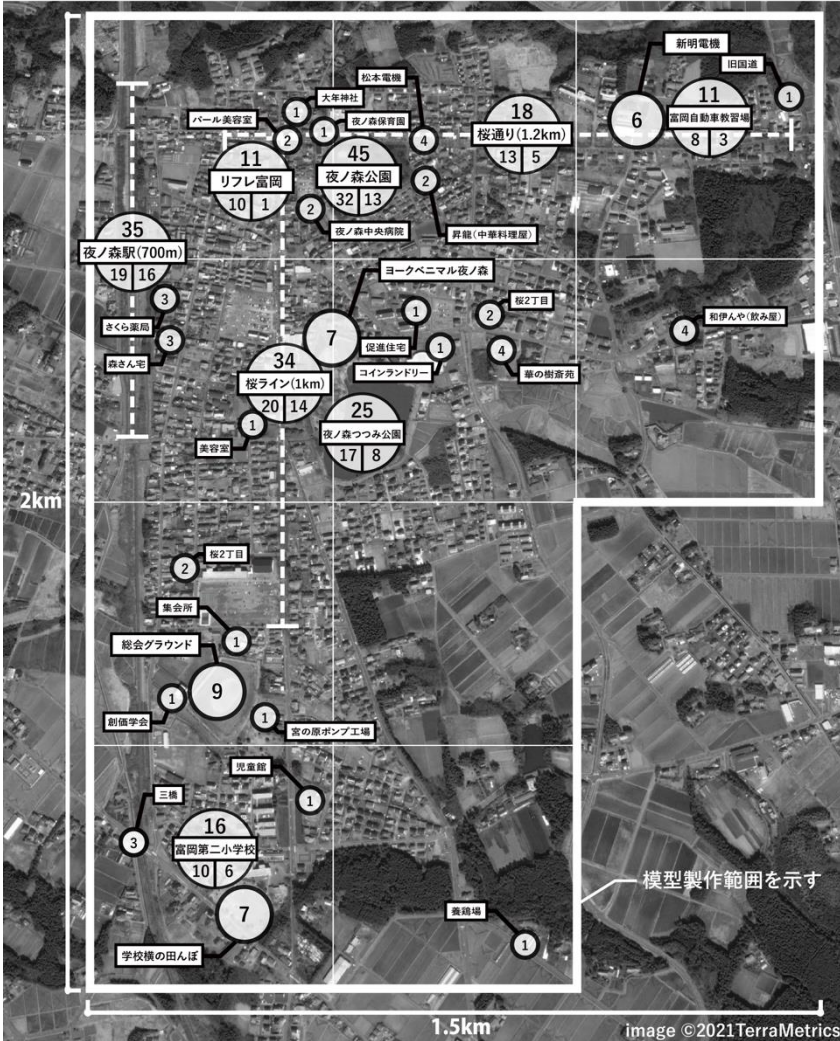


図4 夜ノ森地区 記憶のクラスターの分布図

凡例 〈記憶の旗〉(青)に寄せられた〈つぶやき〉と〈記憶の旗〉(黄)の数の合計による円の大きさの変化を以下に記す。

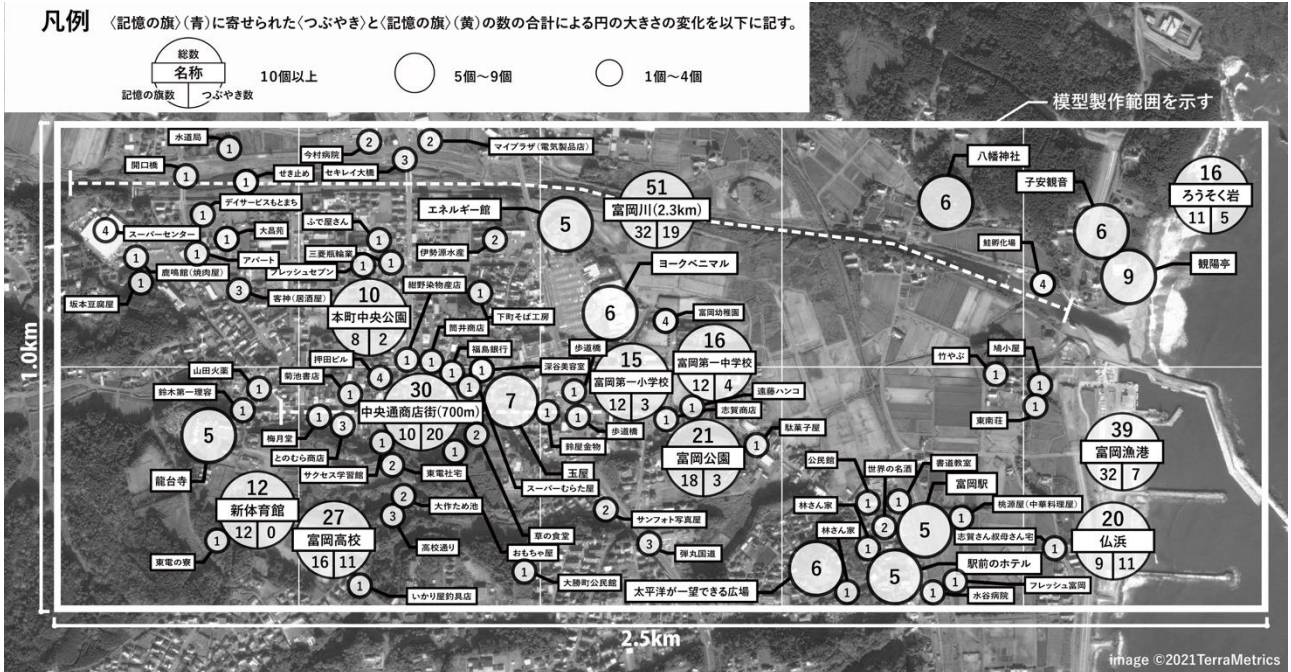


図5 富岡地区 記憶のクラスターの分布図

夜ノ森地区

夜ノ森駅 (夜ノ森地区)

(G) つつじ	(Y) 団地の人や近所の人を下りをした
(Y) 遊歩道	(Y) 昔は大きな土手、ソリソリで遊んだ
(G) 桜並木	(Y) つつじを見るためにゆくり電車を
(Y) 元祖花の駅	(Y) 近くに車を止めてここでつつじを見た
(Y) 但野さんが植えた	(Y) 満開の時は電車が速度を落とす
(Y) 桜木が6本	(Y) つつじの花がすごくきれいだった
(Y) イスを作って花見をした	(Y) 夜ノ森職員でつつじを管理していた
(Y) つつじが野生していた	(Y) 遊歩道から見える記念樹があった
(Y) つつじが夜ノ森花文字	(Y) 道ごとに分けられてツツジの下列り
(Y) 一番大きい早咲きの桜	

つつじが満開のときは電車が速度をおとし、よく桜が見えるように。  
列車沿いにつつじが咲いていて綺麗だった。  
夜ノ森駅から線路沿いにつつじがすごく綺麗だった。5月頃に咲く  
駅のつつじを毎年剪刈りしていた。  
桜に雪が積もっているときも素晴らしいかった。  
つつじを見るために駅の入場券を買って入った。  
線路沿いのつつじは住民みんなで手入れしていた。  
白土米屋のまわりはつつじがきれいだった  
夜ノ森駅の線路沿いの道路から、毎年つつじを見ていた。  
夜ノ森の駅前からつつじ公園の池の方まで細い水路が通っていた。  
つつじがきれいだった。線路が谷になっているので橋から桜やつつじを見下ろすことができ、きれいだった。  
富岡駅から夜ノ森駅までの路線の途中に、見えるはずない場所から太平洋がみえるミステリアススポットがあった。  
駅周辺の土手にはつつじが広がっており、満開時には電車がいつもより速度を落とすとして走行してくれていた。  
夜ノ森駅周辺の土手は緑が広がっていた。自宅から駅近くまで毎日の散歩コースになっていた。駅近くの須賀野商店では日用品やお酒などを購入していた。  
駅周辺のツツジの手入れ(雑草抜きなど)は地域ごとで分けて行っていた。長い距離を手入れしていたのでとても大変な作業だった。残念ながら若年層の人はあまりしていなかった。  
駅を挟んで一橋から二橋までが桜やつつじを楽しむ遊歩道になっていて、よく散歩にいった。花が咲く季節は電車がゆくり走り、車窓からみる桜やつつじも好きだった。

桜ライン (夜ノ森地区)

(Y) 2人で手を繋いで夜桜の下を歩いた	(Y) 鼓笛隊パレードコース (4-6年)
(Y) 組合傘	(Y) 桜並木ここから
(Y) 桜を見るためのキュービッド	(Y) ライトアップされていた
(Y) 桜祭りのヨサコイの舞台	(Y) 角を曲ると桜のトンネルが見える
(Y) 子供達の通学路	(Y) ライトアップされていた
(Y) 私が植えた桜の木	(Y) せきれい桜(しだれ)
(Y) 歩道には赤い虫がたくさん	(G) しだれ桜
(Y) 雨の中ささいをした	(Y) 桜の木が笑っていた
(Y) ヨサコイや火花が家から見えた	(Y) 桜の木がさみしがっていた
(Y) 鼓笛隊のパレードコース	(Y) 夜は桜並木がライトアップされた

小学生の頃、鼓笛パレードした。  
3~4日間桜まつりでよさこいが行われる。桜がアーチのようだった。  
桜のせいで道が日陰となり、冬の雪が溶けず、通勤に苦労した。  
葉桜のときも薄暗い。  
富岡の四年生時が夜ノ森公園まで鼓笛隊で歩いた。23才の娘さんが学校に入った時から続いている。

夜ノ森公園で木の枝でぶら下がりて懸垂をしていた。それが日課だった。  
仕事場から、桜祭りの音を楽しんでいた。  
桜満開の時期は車通れなくて通行止になっていたりもした。  
震災後、観光バスが桜並木を走っていた。それでバスから降りることはできなかった。  
中学校あたりから桜がスタートする。両脇に桜の並木が咲いて桜のトンネルのようだった。桜まつりにはよさこいがあったりした。  
春、ライトアップが家から見えた。桜の樹齢は東西では30~40年、南北では70~80年。  
夜ノ森の桜がすきで、仕事帰りに少し遠回りだけ、桜の時期はいつもそこを通過して帰った。週末は家族みんなでお花見に行った。  
「一緒に桜を見ませんか？」とデートに誘われて、夜に桜並木の下でプロポーズされて結婚した。まだ17歳で心臓がどきどきして泣いていたことを、昨日のことみたいに覚えている。桜が私たちのキュービッドだった。私たちの間にはいつも桜がいた。いつもでも大事に。  
4月に桜のつどいがある。富岡に戻った時に、病気がなくなった桜もたくさんあって、誰もいなくなった街で咲いている桜たちが寂しくて泣いているように見えて、本当に辛くて泣いてしまいました。桜が私たちを待っている。早く戻って桜を抱きかかっていたい。

桜通り (夜ノ森地区)

(Y) ほんほりをそれぞれの家に飾っていた	(Y) 満開シーズンは大混雑でした
(Y) 皆の笑顔がキラキラ輝いていた	(Y) 中学2年生はよさこいを踊る
(Y) 桜がアーチのようにかかっていた	(Y) 桜まつりでよさこいをおどった
(Y) 家から桜のライトアップが見えた	(Y) 早咲きの桜
(Y) 元々の古い桜並木	(Y) 桜並木スタート!
(Y) よさこい祭り中学生踊る	(Y) ここまで桜並木があった
(Y) 桜の木がここにあった	(Y) せ、夜ノ森の桜を見に来てください
(Y) 大きな桜の木が見えていた	(Y) 桜は古いものがおおかった
(Y) 木が並んでいた	(Y) 1900年に植えた最も古い桜たち
(Y) 桜を見に来た人とお茶を飲んだ	(Y) 盆踊りをした
(Y) 花見時、車の匂いもよさこいもなかった	(Y) 毎年、夜ノ森の桜が綺麗です
(Y) クリスマスの電飾が輝いていた	(Y) 桜を見るためのバスが走っていた

姉妹2人でチャリをばばとお母さんのためにケーキを買いに行った  
夏になると桜につつまの毛虫を駆除する前に掛いて回った。  
桜を手入れしてないから、今年花が少なかったように感じた。  
昭和20年頃に夜ノ森公園の東にも咲いていた桜を切って、湯沸かしとして利用していた。  
神明デングの前と公園の横らへんは桜の早咲き。  
他は基本ソメイヨシノ。  
桜の通りが全長5km2500本くらい植えられていた。半谷清さんという方が富岡への入植記念に植えたのが最初。富岡町で卒業式などがあると、その都度記念として植えてきたので、今の規模になった。  
明治30年ごろ、「将来の東北」という当時の農業開発モデルに選ばれ、最初は荒野だったところに町を作っていた。s40年ごろまで半谷清漁の町だったが、そのころ原野ができて、そこからそのベッドタウンとして発展していった。

富岡地区

富岡川 (富岡地区)

(Y) 夏の8/16柏の下で花火みた	(Y) カカシをたてた
(Y) 綺麗なお川だった	(Y) 花火大会
(Y) 春と秋に川の掃除をした	(Y) 灯笼流しをした
(Y) 花火はここから上がっていた	(Y) 昔は桜並木があった
(Y) イカダ祭りがあった	(Y) 昼休みに鮎釣り
(Y) イカダ祭り	(Y) 毎日散歩していた
(Y) 小さめイカダ祭り	(Y) 昔は川で泳いだりしてた
(Y) 火花が飛んできた	(Y) 桜見ながら BBQ
(Y) 鮎の釣り場	(Y) 人が魚をとらなくなりサギが食べ
(Y) あゆりつをした	(Y) 岩場
(Y) 一週間もするとりつしてしまっ	(Y) 花火大会はここから打ち上げていた
(Y) 鮎がはかってくる (秋)	(Y) ゴムボールで川遊び
(Y) 鮎を手づかみ!!!	(Y) 鮎の命綱だったポンプ
(Y) 鮎はいつか祭り、夜は灯笼流しをした。(灯笼流し)	(Y) えびすの笑顔でワンダフル!
(Y) 灯笼流しは門口橋からせき止めまでで行った。(灯笼流し)	

家の前の川沿いで花火大会があった。震災後河口付近の鮎養殖場が壊れて家の前の川付近まで鮎が遡上するようになった。

灯笼流しがあった。  
ヤナ場を外すのに使うお父さんのバーがやぶまで流されてひっかかっていたものを息子さんが発見した。大切に保管している。  
小学校で案山子を作って、6個くらい並んでいた。  
夜に通ると暗くて怖かった。  
春と秋には川の掃除をした。毎日朝の5時から7時までの2時間ほど、みんなで草を刈った。春はまだ柔らかな草が秋には成長して、固くなって刈るのが大変だった。今となってはそれもいい思い出。  
夜川にせき止めがあった。川の流れて逆らって魚が遡上しやすいように、なおかつ川の流れがスムーズになるように土砂などをためるよう配管していた。円錐状の魚道があった。  
子供の頃アユ釣りをした。  
夜に富岡川でカーバイトを明りにして魚を取っていた。もりでついで。  
富岡川は上下水を整備して綺麗になった。  
昔は富岡川の川に魚が桜があった。  
うちわ祭り(8/14)、灯笼流し(8/15)、火祭り(8/16)があった。  
鮎釣りした。鮎が川を登っていった。上流くと水がきれいだった。  
イカダ祭りが8月のお盆頃あり、下は発泡スチロールで上はデコレーションをして各自自分の作ったイカダに乗った。漂れるのでみんな水着で乗っていた。  
アユ釣りしている人を見かけた。

富岡川流域ではいろんな祭りがあった。イワナとり、イカダ祭り、花火大会、灯笼流しなどがあった。  
お父さんの口癖は「ワンダフル」で、うまくいったときによく言っていた。疲れて知らない人で、責任感が強かった。  
震災の3日くらい後に会議があり、組合長であるお父さんを見かけた情報が入った。いろんな人が危ないと言えなかったが、お父さんは責任感の強い人だったのでサケを守らなければ、とその後最後まで動かなかった。サケが可成りしょうがなかった。お父さんは40年近く組合長をしていた。  
お父さんが組合長をしていたサケのヤナ場があった。ヤナ場には建物といけすとポンプがあり、発電機を使って動かしたポンプでサケたちの空気を送り、小屋の中で真っ暗な環境を作り卵から稚魚へ育てていた。暗い環境を作ると、石の下に隠れるような環境に近づき、直射日光や水温上昇、カビからサケを卵を守っていた。作業を行うのも、昼間働かした後に夜に作業をしていた。ヤナ場は鉄骨造りのような鉄骨の鉄でできており、サケがこれ以上富岡川に遡上しないようにしていた。  
サケを収穫するのに、橋から橋まで6~7人で地引網のようにな網を引いて、富岡川に戻ってきたサケたちを捕まえていた。網サケを多く放った時は4年後に網サケが多く収穫できたということがあるので、サケたちは川に戻ってくることを信じている。今年の秋戻ってきたサケがいれば、震災の時に放ったサケもたれなすが、可能性としては低いと思う。もし戻ってきたら、お父さんが戻ってきたような気がするかもしれない。

中央通り商店街 (富岡地区)

(Y) お菓子を売っていた	(Y) うちわ祭り
(Y) 堂か〜、食品か〜	(Y) えびす講の時、みんなが集まった
(Y) 果物屋だった	(Y) バナナのたき売り
(Y) 子どもがみこしを見に行った	(Y) お店が300軒くらいあった
(Y) 秋にお祭り	(Y) えびす講市

夜ノ森駅から富岡駅周辺の市街に買い物にいった。  
日曜日は商店街の端から端まで見送った。  
菊池さんの家付近でやぐらをたてた。(うちわ祭り)  
中央商店街のバシロ屋さんが小さい時から大好きで買いに行っていた。  
小学生の頃、はつかりの屋台や催し物が楽しかった。  
包丁などいろんな生活雑貨を取りそろえた市場。正月の市場はすごく盛り上がる。同時期に「ふくしまつり」(11月)が開催されていた。  
鈴屋金物という金物屋さんがやっていた。今も商店街の同じ場所でお店を開いている。商店街の他のお店のみんなが帰ってくるのを待っている。なによりも、商店街の役員が希望だ。

三社の森にはお稲荷さんと恵比寿さんとだるまさんの三つがあったからそれぞれお稲荷さんはまつねの神様。恵比寿さんは徳売の神様。それにあやかり中央通商店街に出店を出して、「恵比寿講市」という市を開いていた。だるまさんはだるまさん。ダルマ市という小さなだるまを売る市を農作業のスタートする1/15にやっていた。双葉町とかでもやっていた。そっちのが規模はおおきい。  
中央商店街通りで二十日市があり、こどものころから正月に着るものを買って帰っていた。その買物もとても楽しかった。  
えびす講市では服や器などが売られており賑わっていたが、大型スーパーなどができて衰えていった。通りにあるお店でよく味噌汁を食べた  
ふるからある商店街からショッピングモールや大型スーパーへ客足が変わっていった。商店街には昔からある金融機関などがあった。  
包丁などいろんな生活雑貨を取りそろえた市場。正月の市場はすごく盛り上がる。同時期に「ふくしまつり」(11月)が開催されていた。  
次の日の朝に東電の原発がおかしという噂をききつ、外部に避難を余儀なくされた。自分の家から簡易道具をもって避難した。

毎年7月に商店街から神社まで子供供祭りがあって、娘たちが参加していた。  
明治からある、赤いレンガ造りの蔵が商店街に点在していた。  
商店街の北に小さい川が流れていた。そこでかじか、ごり、タニシ、しみがいたり。一回小さいうなぎがとれたことも。横石といつて水路が石でできていて、その隙間にはいろんなものがいた。水路では食べ物を捨てたり、簡単な洗い物もそこでやっていた。年に一回みんなできらびりしていた。  
春はお花見に、春祭りがあって、夏は花火と盆踊りがあり、秋はえびす講市があり、1年中たくり賑わっていた。屋台は300軒ほど並び、わたあめやイカ焼き、お団子などもたくさん売られていた。イオンなどの大きな商業施設ができるまでは、初売りもやっていた。  
子安モナおしかなかった。  
えびす講市では、屋台がいっぱいで、ステージも出ている。  
そこでよさこいも踊った。  
富岡高校の新体育館に震災当日は避難し、コンクリートの床で就寝した。

□ 記憶の旗 ○ つつやき

図6 記憶のクラスターの例(線状の要素のみを抜粋)

にも「毎日釣りをしていた」という自然環境に親んできた生活空間が確認出来る。また、現在に至っては津波の影響で富岡漁港はなくなってしまったが、遡上する鮭を捕獲するヤナ場が10月に設置され、町の豊かな自然環境を活かした復興が期待される。また、桜ライン、桜通り、富岡川に関しては証言が収集された範囲が1地点を指すものではなく、線的な要素であったため、ここまで多くの記憶が集まるクラスターとなったと考えられる。

## 5.2 富岡町特有の伝統と文化

地域特性を把握する上で、その地域、町に根差した伝統や文化は非常に重要な情報となる。夜ノ森地区においては桜が伝統的に有名であり、その桜並木では毎年春に「さくらYOSAKOI」と称し、よさこいが開催される。地元の富岡第二中学校の生徒から全国規模でよさこいを踊るチームまで老若男女問わず、幅広い方々で賑わってきた。ここでは「よさこいや花火が家から見えた」や「小学生の頃、鼓笛パレードをした」などの証言が寄せられた。また、富岡地区においては富岡川にて灯籠流しやイカダ祭りなどが行われ、「デコレーションをして、各自作ったイカダに乗った」などの証言が集められた。夜ノ森・富岡の両地区共に祭りやイベントに関する証言が多く見られたが、これは桜並木や富岡川が町のシンボルであることも大きな要因をなしているが、自身が参加するだけでなく、家や川の土手から見たり、広報で全国に発信されているのを知ったり、学校の伝統行事となっていたりと多様な立場、場面で長きに渡り、これらの行事を体験していることでここまで、大きなクラスターを形成することになったと考えられる。

## 5.3 住民の生活圏が現れる目貫通り

商業空間として最大のクラスターとなったのが富岡地区の中央通商店街である。ここでは、「子安モナカがおいしかった」、「食パン屋さんが好きで小さい頃から買いに行っていた」という日常の買い物風景だけでなく、「商店街から神社まで子供神輿があって娘が参加していた」、「えびす講市では服や器などが売られており、賑わっていた」など毎年7月に催されるうちわ祭り、11月に開催されるえびす講市があることで、多くの記憶が収集されたと考えられる。また、創業100年を超える玉屋菓子店や客神(居酒屋)などの地元の方に親しまれてきた店舗では「みそ饅頭を売っていた」や「キャラメルプリ

ンロールがおいしかった」、「鮭茶漬けがうまかった」などの地域住民だからこそ知っている地域性が現れた証言も多く見られた。これらの点から地域で長く親しまれ、目貫通りとして魅力ある空間を提供し続ける店舗は地域住民の憩いの場、記憶を形成する場となると考えられる。

## 5.4 多世代が集い賑わう公共施設

ここまで考察してきたものは線的な要素が多く、通りや川というものが町の住民にとっての生活や、町のアイデンティティに非常に深く関わってきていることが見て取れる。しかし、町の生活空間は線的な要素だけで構成されておらず、学校や公園、商業施設などの点的な場所も含めて成り立っている。そのため、本項では点的な要素でクラスターが大きかったものについて考察を行う。

富岡町において、線的な要素である桜並木や富岡川に次いで大きなクラスターを形成したものが学校や公園などの公共施設である。公共施設は全て点的なクラスターで構成されており、夜ノ森地区においては夜ノ森公園、夜ノ森つつみ公園、富岡第二小学校があげられる。それらの収集された証言を分析すると、どの地域でも見られるような「野球をした」、「タイヤの跳び箱」のように幼少期の遊びの様子が思い出になっていることが確認出来る。一方で、「ここでよく花見BBQをした」や「つつじの花がすごく綺麗だった」など、桜通りと桜ラインの2つの桜並木に面した場所であったからこそ、祭りやイベントの際にそこが催し会場となり、その場所での記憶が強く残っていることがここまで大きなクラスターを形成した要因の1つだと考えられる。

また富岡地区においては、富岡第一中学校、富岡第一小学校、富岡公園、富岡高校、本町中央公園、太平洋が一望できる広場があげられる。富岡高校に関する証言では「臨時職員として働いていた」と学生ではなく、職員としての立場からの証言や、「平成6年に女子校から共学になった」と昔は女子校であったという証言が多く、町全体として伝わり認識されているクラスターであることがわかった。また、本町中央公園では「昔は馬と牛のせり場」、「小さい頃は牛の競り場に遊びに行った」など、富岡地区が牛の飼育やせり場として賑わっていたことが認識出来る。夜ノ森地区、富岡地区を通し、共に公共施設に集まる証言は似通っているものの、それぞれの施設の周辺状況により地域の特徴的空間が色濃く反映されることが認識出来る。



### 5.5 クラスタ形成しない記憶

夜ノ森・富岡合わせて114箇所の記憶のクラスターが形成されたが、クラスターを形成しない記憶の旗やつぶやきも数多く存在する。「同級生だった」、「昔、飲み屋だった」のような過去に何があったのかを示すものや、「逃げ出したダチョウがいた」のように場所が特定できないものが多く存在した。一方で、ある場所は特定できなかつたり、模型製作範囲外であったが「夜ノ森の一橋から西へ3～4kmいったところで火祭りがおこなわれた」、「牛を飼っていた」のように町の伝統を示す証言も存在した。

### 6. 記憶のクラスター化から導く地域空間の特徴

夜ノ森地区と富岡地区は隣り合った町であるにも関わらず、クラスター化されたエリアには大きな違いが見られた。夜ノ森地区は夜ノ森駅を起点に東西に延びる桜通り沿いと南北に延びる桜通り沿いに記憶のクラスターが集積している。このことから、夜ノ森地区は駅を中心とした賑わいがあり、特に桜並木での祭や行事を核として賑わってきたと考えられる。他にも付近の住民が分担して夜ノ森駅のつつじの花壇の世話をした思い出や住民の団結力を窺わせる記憶が多く見られたことから、明治時代の入植地に育まれたコミュニティの様子を読み取ることができた。

一方で、富岡地区は東西に流れる富岡川や沿岸部のろうそく岩、富岡漁港、仏浜など自然にまつわるエリア、中央通商店街などの通り沿いに多くクラスターが集まったことから、自然環境を生かして生業や生活が長く育まれてきた様子が伺える他、商業や学校、駅など町の中核機能を果たしてきたエリアとしての記憶を読み取ることができた。現在、避難期間中に多くの住宅や店舗が解体撤去され、かつての賑わいのある風景が失われている状況にあることを考えると、こうした情景の再構築が地域空間の継承に重要な役割を果たすと考えられる。

津波被災地の場合、被害地域は沿岸部とそれに続く低平地に偏るが、富岡町の様な原発事故による全町避難をおこなった地域コミュニティの場合、沿岸部も内陸部も、10年を超える避難期間の内にコミュニティの世代構成自体の変容も加わり、地域の記憶の継承において大きな障害となっている。津波災害と原子力災害において、地域の記憶継承に違いがあるとすれば、前者は大規模な空間の変容に対する地域空間の記憶の復元であり、後者は不在期間の経過

によって失われゆく地域の記憶の継承である。失われた街PJの記憶の街WSという共通の手法によって得られる地域の場所の記憶は共通しているが、原子力災害の地域における記憶の継承の課題は、より地域全体の空間的特徴を大きな構造から描出し、帰還した子供達や新しくその地に入ってきた人々など、継承が望まれる世代に伝わりやすく描出することが求められる。

富岡町で開催した記憶の街WSは、富岡町における二つの大きなコミュニティである富岡地区と夜ノ森地区が同規模で発達してきたという特徴があったため、同規模の復元模型を用いたWSを行うことによって、両コミュニティの違いを明快に示すことができた。<sup>(7)</sup>また通りや河川など、線的な空間に沿って記憶が分布するクラスターが観察できたことは、記憶の街WSにおいて地域の空間構造を再構築する上で特筆すべき傾向であった。

線的なクラスターとしては富岡地区において商店街と富岡川流域の空間、夜ノ森地区では桜並木の通りと駅周辺の空間において、イベントの記憶や個人的な出来事、情景の描写など、地域における重要な景観要素として住民に広く共有されていることが読み取れた。記憶の街WSでは記憶の旗やつぶやきが模型上の特定の場所を指示して離散的にプロットされるため、場所の記憶は離散的な点の分布として記録される。津波被災地域で行ったWSの結果とも共通するが、学校や公共施設など住民の多くが利用する地域空間の点的な要素に記憶が集まる傾向にある<sup>(6)</sup>。富岡町の2地区の場合、特に線的な空間のクラスターが顕在化したことは、富岡町の地域空間の特徴として位置づけることができると思われる。

また他地域でのWSの中でも通りや河川、海岸線といった線的な空間のクラスターを見出すことで、WSの結果から地域空間の継承手法の開発に寄与することが期待される。

### 7. まとめ

以上本論では、富岡町でのWS「記憶の街ワークショップfor富岡町」において収集された富岡町中心部（富岡地区・夜ノ森地区）の記憶を分析し、多くの住民に共有され証言された場所性の強い地点がどこにどれくらい存在しているのかを明らかにし、記憶をクラスター化することで、富岡町中心部の空間構造の一部に見える化し、かつての生活空間の特徴を継承しやすくする手法について考察を行ってきた。結果として以下のことが明らかになった。

・富岡地区、夜ノ森地区の復元模型それぞれに集められた記憶の旗、呟きの数が拮抗する数であり、黄色（出来事）は富岡355,夜ノ森365というように、大変近い数集まっていたことから、富岡町における富岡地区、夜ノ森地区の両地区は性質は異なれどもコミュニティの規模、存在感において拮抗しており、二つの大きなコミュニティによって富岡町が構成されている様相を明確に示すことができた。

・拮抗しているとはいえ、二つのコミュニティの性格としてはむしろ対比、違いの方が明確化に表れた。特に明治時代の入植とともに地域が始まった夜ノ森は駅や道路、公園など人工的な都市計画的要素やその場所について、祭りや住民活動の経験に根ざした記憶が多かった。一方で富岡町は河川などの地形的要素や漁港など生業に関わった記憶が多く寄せられた。また商業や国道沿いの店舗など、町の中核機能を担っていた場所としてのクラスターがいくつか見られた。

・また本論における分析において両地区それぞれ集まった記憶が線的なクラスターとして顕在化したことは特徴的であった。岩手県大槌町における槻橋らの研究<sup>4)</sup>で示された様に地域空間における記憶が集まって中心的な場所を構成するケースが多い中で、線的な延長をもった場所性のあり方が示せたことは、今後地域空間の場所性の評価において新しい記述方法の開発につながる可能性がある。今後、他地域でのWS結果の分析を通して、さらに研究を深め、地域空間の場所性に関する記述モデルの構築、継承方法の開発を進めていきたいと考える。

## 謝辞

WSの開催、実現においてお世話になった全ての皆様、特にWSに参加して下さった富岡町民の皆様に厚く謝意を表します。

## 補注

- (1) 福島県、福島県から県外への避難状況、調査時点:令和3年10月8日(金)
- (2) 「失われた街」模型復元プロジェクト(2015年日本建築学会賞(業績))
- (3) 「記憶の街ワークショップ for 富岡」、2015年6月1日-7日、会場:郡山市富田町若宮前仮設住宅団地内おだがいさまセンター(6.1-6.3)いわき平交流サロン内会議室・いわき市平下高久応急仮設住宅集会所(6.4-6.7)、主催:「失われた街」模型復元プロジェクト実行委員会、共催:富岡町、協力:歴史・文

化等保存プロジェクトチーム、富岡町社会福祉協議会、日本大学浦部研究室、模型製作:神戸大学槻橋研究室、東北工業大学福屋研究室、東北工業大学学生有志団体 colors

- (4) ワークショップの準備過程で模型製作範囲を検討している中、富岡町からの要望もあり富岡地区、夜ノ森地区の両方を制作することとした。
- (5) 2015年のWS後、模型は郡山市の仮設住宅地の一角に富岡町によって保管され、その後富岡町体育館に移され、2021年に開館した伝承施設「とみおかアーカイブ・ミュージアム」に収蔵された。収蔵に先立って2020年12月に模型の補修を兼ねたワークショップを富岡町で開催した。WSの様子はNHK-BSプレミアム「ふるさとの記憶 2021「福島・富岡町」」(2021.3.21)にて放送された。
- (6) 参考文献4参照
- (7) 今回模型で復元した富岡地区は原子力災害に加えて沿岸部に津波の被害を受けた部分も含まれるが、本研究では原子力災害による全町避難と地域の記憶の継承方法に焦点を絞ったため、津波災害と原子力災害が重複して起こった地域の特殊性については考察を行っていないが、今後の課題としたい。

## 参考文献

- 1) 槻橋修(2012), 東日本大震災で被災した地域コミュニティの再生とまちづくり-復元模型を活用した気仙沼市でのワークショップを通して, 日本災害復興学会論文集 No. 2, pp1-8
- 2) 槻橋修, 平尾盛史(2013), 被災地における記憶の総合化のための復元模型の活用方法に関する研究-気仙沼市内湾地区における復元模型ワークショップの中で得られた証言を通じて, 日本災害復興学会論文集 No. 5, pp1-10
- 3) 槻橋修(2014), 場所の記憶による地域空間の再生に関する研究, 神戸大学博士論文
- 4) 槻橋修, 他(2014), 被災地における街の記憶の復元と共有手法に関する研究 - 岩手県大槌町町地区における復元模型ワークショップ, 日本建築学会論文集, 第79巻, 第699号, pp1129-1137
- 5) 磯村和樹, 友渕貴之, 槻橋修(2019), 東日本大震災の被災地における記憶の街ワークショップの手法の変遷-模型製作を通じた被災前の地域空間の記憶の復元手法に関する研究 その1, 日本建築学会計画系論文集, Vol. 764, No. 84 pp2139-2149
- 6) 筈谷 友紀子, 阿部 大輔(2019), 空間の残存程度からみた悲劇の記憶の継承メカニズムの考察 ハンセン病施設の保存に着目して, 都市計画論文集, 54巻(2019)3号, pp. 600-606
- 7) 福島県富岡町(2021), 東日本大震災・原発事故からの復興現況と町の現状